

命つなぐ 家族の光景

息を引き取った曾祖母の顔に触れる少女や認知症の妻と見つめ合う夫、白衣を脱いで患者と向き合う医師……。東近江市の永源寺地区を舞台にした写真展「いのちをつなぐ あたたかな看取りの場」が京都市下京区の東本願寺・しんらん交流館で開かれている。30日まで。



國森康弘さん

永源寺舞台の写真展、京都で

撮影したのは、大津市の写真家でジャーナリストの國森康弘さん(41)。2003年のイラク戦争を機に神戸新聞記者を辞めて独立し、紛



生ききった「あたたかさ」60枚

争や貧困で混乱する地域を中心に写真を撮ってきた。10年に東近江市で開いた写真展を機に、在宅医療に取り組む永源寺診療所の花戸貴司医師(45)を紹介され、訪問診療などに行けるようになった。

今回の展示は、約2年かけて撮影した万単位の写真から選んだ60枚。介護や医療の専門職が力を合わせて患者に寄り添う場面や、家族が寝たきりの高齢者に力を与えているような光景が並ぶ。

國森さんは看取りを「命をつなぐバトンリレー」と表現し、「悲しみだけでなく、生命のほとぼりのようなものを感じるがあった」と振り返る。取材を重ねた紛争地や東日本大震災の被災地では、寿命を全うできずに命を絶たれた「冷たさ」を感じた。だが、永源寺地区で見た死は命を生ききった「あたたかさ」があった、と言う。

「大切な人の最期に自分は何ができるか。自分はどう命をつないでいくかを考えてほしい」と國森さんは話す。入場無料。午前9時～午後7時(土日は午後5時)。問い合わせはしんらん交流館(075・371・9208)へ。(青田貴光)

「いのちをつなぐ」と題した写真展＝京都市下京区